
一条探偵事務所へようこそ！

kurobuchi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一条探偵事務所へようこそ！

【NNコード】

N3465N

【作者名】

kurobuchi

【あらすじ】

高野龍弥は、いつまでも続く日常に、若干の退屈を覚える高校一年生。そんな彼は、始業式の日。とある少女の悪口を、本人がいると知らずに言ってしまう。

「だれが電波女ですって？」

小さいけれど、その鋭い視線は虎をも殺しそうな少女。一条優花。彼女の出会いが、龍弥の高校生活を波乱の非日常へと変える！小さな探偵と、平凡な助手が繰り広げる。黒淵メガネの処女作！

どうぞ、寛大な目で見てやつてください。
それでは、はじまります。

第一話 出会い

「まつたく……」「

暴力のように眠気を吹き飛ばす目覚ましを黙らせて、数分が経つ。未だに眠気は俺の頭の六割の機能を奪い、俺は欠伸をして、その眠気を体外へ吐き出す。

部屋のカレンダーに田をやり、これから始まる田常にため息をつく。

「せっかくの休みも終わって、これからまた学校か」

そんなことをぼやきながら、俺こと高野龍弥は部屋を出て、それからリビングへと向かった。いつものように、テレビのスイッチを押して、テレビを見ながらパンを取り出す。すると、俺の注目を集めの一コースが飛び込んだ。

『 昨夜十時頃、××県岡崎市岡崎町で、男子高校生が殺害されという事件が発生しました。この男子高校生は』

岡崎つて、俺が住んでいるところじゃん。俺はパンをトースターに入れながら軽く考えた。

「警察は、この事件を岡崎市、高校生連続殺人事件の四人目の被害者として捜査を進める方針だということです……」

嫌な事件だ。さつさと解決してほしい。俺は焼けたパンにバターを塗りながら思った。

食事といつても、食パンと牛乳の簡単コンボを五分でほおばり、俺は身支度を整えた。

俺の家には現在、俺以外の家族は住んでいない。両親は海外に本社を置く企業に勤めており、現在はヨーロッパの何処かにいるはずだ。別に、両親がいなくても、別段困ったことも無いし、隣の家がいろいろと面倒を見ててくれてるので、そういうふた不自由さを感じたことはない。

ピンポーン。

ほら、噂をすれば、お隣さんのお節介がやつて来た。

「お～い、リュウ！ 朝だぞ、起きてるか～」

玄関から、何とも平坦な日本語が聞こえてきた。俺は洗面所へと向かつて、歯を磨きながら、その声に返事をする。

「ああ。歯を磨いたら行くから、待つてくれ、恵里香」

「ほいほーい。んじや、燕が来るまで待つてるよ」

玄関の声は、そう言い返してきた。俺は、その返事を聞いてから口を濯ぎ、タオルで口を拭いて、彼女が待っている玄関へと赴いた。

「よう。今日も朝からトレーニングか？」

俺は下駄箱に置いてあったスニーカーを履きながら、田の前の少女に言った。

「そうだぞ。お陰で、この季節なのに汗だくでさ。親父殿も手加減してくれないし」

そんなことを言いながら、玄関で飲料水を飲んでいるのは、幼馴染の富藤恵里香だ。

小学校になつてこの岡崎市にやつてきた恵里香は、日本人とフィンランド人のハーフである。そのせいもあってか、日本では、まずお目にかかるいような綺麗な亞麻色の髪を、ストレートに背中まで流していて、その髪は最早、芸術品のような美しさを持っている。身長は一六〇程で、北欧出身だからか、肌も雪のように白い。

「刑事になる為の一環だろ？ 確か、柔道か剣道のどっちができるないとダメなんだよな」

「そーなんだよ。撃つて守れるだけじゃ、ケーセツにはなれないんだよ」

「なんだか、それだけ聞いてると野球選手みたいだな」

ちなみに、彼女の祖父は警視総監。父は有名な刑事という、ぱりぱりの警察一家なのだ。そのせいもあってか、自然と恵里香も、祖父や父と同じ警察の道を歩んでいくつもりらしい。その夢は、恵里香の小学校からの夢だった。

「野球選手と一緒にすんな。ってか、どうしてリュウは警察田指さ

ないんだ？ 男なら燕みたく警察か消防士を田指したほうがいいぞ？」

靴を履き終えた俺は、恵里香と共に玄関へと出た。朝の眩しい日差しが、俺と恵里香を出迎えてくれる。

「どうしてつて、恵里香。お前なら分かるだろ？ 俺は、そんな柄じゃない」

「まあ、守られてばかりだからな。でも、厄介事持ちこんでくるワタシが言えた事じゃないけどさ、もう少し頼りになつてくれると、ワタシは嬉しいんだけど」

「いや、お前の関わる事件で頼りになる奴は、絶対常人じゃねえよ」まあ、恵里香が持つてくる厄介事は、高確率で危険だ。数日前も、恵里香のせいで強盗事件に巻き込まれたところだ。正直、俺は生きていた気がしなかった。

「まあ、そういうた経験が、後々の人生で役に立つのぞ」「できれば、そんな経験が生かされない職場で働いていきたいものだ」

玄関を出る前に、そんなことを恵里香と喋った。でも、今思えば、これが俺の最後の日常となるのだとば、この時の俺は知る由もなかつた。

岡崎高校は、俺の通つている学校の名前だ。県下でも有数の進学校であり、生徒数六百人という結構大きい学校だ。

県庁所在地である岡崎市にある岡崎駅から徒歩一〇分という近場にあるおかげで、電車通学の生徒にも優しい学校である。だが唯一の難点は、学校が急な坂道に建つてているということだ。

岡崎市は、海と山に挟まれた都市だ。山がすぐそこまで迫つて来ているので、市 자체は非常に長細くなっている。昔から中国やオランダとの貿易が盛んで、異国の里とも呼ばれていた。岡崎市の後ろに聳える山は、八坂山と呼ばれ、その向こうにある街が境市、その

向こうにある盆地が時雨市となつていて。

俺達の学校は、その八坂山の麓に建つていて。その為、えらく急な坂の真ん中に建設されているのだ。その坂は、第一回生達が破顔坂と呼んで以来、それが正式名称となつてしまつたそうだ。まあ、登つてみると分かるが、これは心臓破裂の坂つてレベルじゃない。本当に顔が破壊されてしまいそうだ。

「あ、暑い。久々に登つたから汗だくだ

「なんだよ、あの程度でへばつて。これだからリュウは」

「毎日あの坂をランニングコースにしている奴は大丈夫そうだな」俺は、皮肉げに恵里香に言った。そんな俺達は、破顔坂を無事登り切り、各教室に貼られていたクラス分けの貼りだしを見つめていた。

「俺は三組か。恵里香は？」

「愚問だな、リュウ。リュウが三組ということは、ワタシも必然的に三組だ」

恵里香がどや顔で指差す先には、彼女の名前が記されてあった。

一年二組 宮藤恵里香。

俺と恵里香は文系なので、同じクラスなのだ。

「これで一年連續だな」

「だな。中学を含めると五年連續だぞ」

そう、俺と恵里香は、中学時代からずっと同じ時クラスなのだ。この調子だと来年もきっと同じクラスだろう。別に、ここまでくると驚かない。

暇になつた俺は、教室に入らずに、そのまま教室前のクラス表の貼りだしを眺めていた。男子はあらかた見終わつたので、てきとーに女子の名簿を眺めていた。

そんなとき、ある名前が俺の目に止まつた。

「一条 優花」

特に意識はしなかつた。一条って名字も、優花って名前も、特別目立つ名前ではない。けど、なぜか分からぬが、俺はその名前を

ぼそつと呟いてしまつた。

「ん？ もしかしてリュウ。一条さんに田を付けていたのか？ リュウも、見た目だけなら女を見る目があるな」

さつきの独り事を聞いていたのか。俺の隣から、ひょっこりと現れた恵里香が言つた。

「いや、別に知らない人の名前だ。その一条さんって、そんなにモテるのか？」

暇つぶしついでに、俺は恵里香の話に返事をした。すると、恵里香は神妙な顔をして貼りだしを見つめる。

「ああ。ルックスだけなら校内屈指だと言つてもいい」「ルックスだけなら？」

そう俺が返すと、恵里香が苦笑いで言つてくれた。

「いろいろ変なウワサがあるんだよ。実はヤクザ平山組のご令嬢だとか、一人暮らししているのは家族に殺されそうになつたからだとか」

「かなりハードな噂だな」

もし噂が本当だつたら、かなり危ないやつじゃないか。

「それにさ、そんなウワサが広まるようなことを、一条さんはやつてきてるんだよ。理科室で怪しげな液体を混ぜ合わしたり、授業中に原稿用紙を広げて小説書いたり。『何やつてんの？』って、聞くと、いつも『偉大なことをする』つて返つてくるらしいし」

なんだよそれ。変つーか、最早電波女じやねーか。

こんな進学校にもいるんだな。頭のネジが外れた変人が。

「……つまり、一條優花つてのは、馬鹿でアホな電波女つてことなんつて、どうした？」

俺が恵里香を見ると、恵里香は、まるで狼と視線の合つた野兎のような顔で、俺に視線で『リュウ！ 後ろ後ろ！』と訴えかけていた。

「一体、どうしたんだ？」

「もしかして、後ろに狼でもいるの？」

か？冗談めかしながら、俺は恵里香の言つ通りに後ろを向いた。

「誰が電波女ですって？」

そして同時に、全身の血の気がサーッと引いていくのが分かった。岡崎高校指定の黒に近い紺のブレザーに、黒く透き通った瞳を持つ三角眼。高校一年にしては低すぎる背丈に、腰まで届く綺麗な漆黒の黒髪を靡かせている少女だった。

正直な感想は、とても美人だということだ。大和撫子、とはこういう娘を言うんだとも思つたさ。けど、俺の頭はそんなことより危機的状況にあることを必死に訴えていた。

「ま、まさか 一條さん？」

おそるおそる俺は聞いた。すると、彼女はこめかみのあたりをヒクヒクさせながら怒りを抑えて言った。

「ええ、いかにも私が一条優花よ。自分のクラスの教室に入ろうとしてたら、私の悪口を言つてる男子生徒を見つけたの。あなたなら、一体どうします？」

後半のセリフは優しさを含んでいるようにも聞こえたが、俺は理解している。間違いない、そんな生やさしい物じゃないと。

まさに被告人と裁判長だ。

「あ、あははは。き、ｋｋｋｋ氣のせいじやないかなあ」

俺も、なんとか自分の無実を訴えた。しかし、どう見てもごまかしきれていない。

そもそも、相手は俺が悪口を言つていたところを目撃しているのだ。そんな現行犯である俺が、何を言つても言い訳にしかならない。恵里香に助けを求める視線を送つたが、恵里香は首を横に振つた。

……仕方ない、謝ろう。そう心に決めた。しかし、

「……そう、気のせいなのね。分かつたわ、邪魔して悪かったわね」と言つて、一条優花は、何故か踵を返して教室に入つていった。あまりの緊張で聞こえていなかつた辺りの喧噪が、やつと耳に入つてきた。

な、何でか分からぬけど、助かつた。……と、思ったその時。

「そんなワケあるかああああああああ！」

急に声が聞こえたかと思うと、助走をつけて俺に向かつて走り出し、小さい影は、俺の腹に向かつて唐突な蹴りを見舞った。

「ぐはあ！」

俺以外の近くの生徒は、悲痛な俺の声に驚き、足を止める。鳩尾に、ねじ込まれるような一撃がクリティカルヒットした俺は、無惨に倒れた。

なんつーノリ突っ込みだ！

「フン、馬鹿じゃないの！　聞こえてないと思ったの？　あんたバカなの？　死ぬの？　ならここで死んどきなさい……！」

罵倒のフルコースを並べて（バカ一回、死ね二回）一條優花は今度こそ教室に入つていつた。なんだか、踵を返した時に靡く黒髪とか無駄に優雅だつた。

俺は体を丸めて痛みに耐えていた。半端ないぞ、これは女子高生の蹴りじゃない。少し前にも恵里香のせいで強盗に蹴られたが、もしかしたら、あの時の強盗以上の威力だぞ。

死にはしないが、死ぬほど痛い。そして、俺を見る他の生徒たちの目も痛かった。

「えっと、大丈夫か？」

そんな中、恵里香だけが俺に慰めの言葉をかけてくれた。

第一話 作るのナ一（前書き）

（・・・） いこつは、シーンが変わる時にお邪魔します。

第一話 作るのよ！

その後、俺は始業式直前まで必死に一条の一撃に耐えていた。鳩尾を優しく右手で押さる様子は、腹痛か妊婦のそれを思わせる。そんな痛みの中始業式へと赴き、ようやく痛みが収まってきたのは、始業式後のことだった。

教室に返ってきた俺は、その出来事を、中学時代の悪友に話した。すると……、

「あはははー、それで一条に蹴られたってか？ 傑作だな」

このよひこ、見たとおり顎が外れん勢いで笑われた。そんな彼の名は近衛燕。髪を校則ギリギリまで茶色に染めている、いかにも今時な高校生である。しかも、美形という長所がある。この顔が作り出す笑顔が、今までどれだけの女性を虜にしてきたのだろうか。まつたく恨めしい。

「ひるやこ、燕。はあ。朝っぱらから不幸だ」

俺は肩を落とした。大げさなため息に、蹴られた鳩尾が痛みを訴える。

「なあ工藤、一条について何か知っているか？」

俺は後ろの席の少年に問いかけた。するとその少年は眼鏡をくいつと上げながら答える。

「そうだな。2年の最高成績者で容姿端麗、成績優秀、文武両道の完璧な人だけど、裏では変人と呼ばれても申し分ない事をしている

らしげぞ。まあ、話自体には結構尾ひれがついてるみたいだけだな

工藤というのは、眼鏡をかけているこの少年。本名は工藤祐介、学年の中でも五番以内には必ずいる学力五四万の化け物だ。しかし、工藤の話を聞いても、一条が一体どんなことをして変人呼ばわりされているのかは分からなかつた。恵里香から聞いた限りじや、理科室で一人怪しげな実験をしたり、授業中に小説書いたりしているらしいことは聞いたけど……。しかし、この時点でも大分おかしなやつではあるんだが。

もう少し、彼女について聞きたかった。

「多少の尾ひれは仕方ないだろ。で、実際一条が、どんなことをしたのか聞か

「失礼するわよ」

せてくれ。そう言おうとしたところで、俺は聞こえてきた少女の声に、目を丸くして言葉を失つた。思わず振り返る。

「…………」

沈黙する俺たち。

そう、どういう経緯でこうなったのか、俺にも全然わからないのだが、何故だか知らないが、紛れもない一条優花本人が俺達の会話に割つて入ってきたのだ。

「……ちょっと、あんた達

鋭い視線で俺達三人を見下げる一条。その視線が物語るのは、今朝の報復の続きか。

「　　」…………「　　」

氣まずい空気が流れる。いついつ空気は突破するのが難しい。今までの自分の勘が言つ。だが、その沈黙を破つたのが、紛れもない一條だった。

「あんた。ちょっと来なさい」

一条は俺に指を指すなり、いきなり俺の腕をぐいぐいと引っ張つてきた。

「お、おい！ 何するんだよ」

ビックリした俺は、一条の手を振り解いて問い合わせる。すると、鋭い三白眼が、俺の事を睨んできた。

「いいから来なさい！」

そんな俺の質問は、一条の鋭い目つきでバッサリと切り捨てられた。鋭い一括。この一言でどんな猛獸すらもただの子猫に成り下がりかねん勢いだった。

従うしかないよな……。

そして、俺は考えるのを止めた。

(・・・)

ここは屋上。岡崎高校で最も高い北館の校舎である。この岡崎高校は、破顔坂と呼ばれる傾斜のキツい坂の途中に建つており、北側に位置する北館は、南側にある南館よりも若干高い。そ

の北館の屋上から見える景色は、岡崎市の市街地を一望でき、生徒の間では密かなスポットにもなっている。

しかし、今はホームルーム中だ。だから、この屋上に人の姿はなかった。

俺は、引っ張られた袖を元に戻す。その間も、一条は優雅に屋上から桜を見ていた。

春の屋上は、学校の校庭の桜が綺麗に見えるのだ。

「おい、一体何の用だ？ ホームルームも始まってるんだぞ？」

俺の数歩先にいる一条に問いかける。すると、一条はふり返りずに、視線を校門の桜から空へと移す。

「あんた、人に悪口言つといてよくそのまま相手と会話しようなんて思うわね」

ぐつ、やはり根に持つているのか。

まあ、そりやそうだ。悪いのは俺なんだから。けど、だからって、呼び出しておいて話しかけるな、はないだろ。しかし、俺が悪いのもまた事実だ。

「確かに、あれは俺が悪かった。謝るよ……」

俺は素直に頭を下げようとした。

「いいわ。あなたの土下座なんて見ても目覚めが悪いし……」

土下座までするなんて言つてない。でも、それは頭をさげるなってことか？

一条は振り返つて俺を見てきた。俺も一条を見返した。やはり、今

見ても一條は綺麗だった。洋服より、着物の似合こそうな撫で肩。

白魚のような指。桜の花びらのような脣。

性格はアレだつて恵里香は言つてたけど、本当に見た田舎元壁だよな。

そんなことを考えてること、一條は付け加えるよひに咳いた。

「その代わり、せつて欲しいことがあるの、龍弥」

「は？ 今、じいつ俺の名前を……。

「や、やつて欲しい」とつて？

「そう、あんたと私で」

「なんだ、ある程度のことだつたら相談には乗るぞ」

俺は取りあえず一條に聞いた。なんでの時、こんな事を口にしてしまったのだろうか。今思えば、これがそもそも始まりだったのだろう。

優花はふり返つて両手を広げて言つた。
春風が吹き荒れた。校庭の桜の花びらが、この辺りまで風に運ばれて踊つている。

そして今、まさにこの瞬間に俺の最後にして最強の不幸と、壮絶な非日常のドタバタ学園生活の幕が開けたのだった。

「探偵事務所を作るのよー」

そう一條優花は高らかに宣言した。

第三話 一条優花と高野龍弥（前書き）

少し長いです。

第三話 一 条優花と高野龍弥

「」は下駄箱の前である。

H.Rも無事終了し、始業式のための一回は終わりを告げていた。俺は工藤、燕とゲーセンに行く約束をしていたのだが、今この状況に、俺は持っていた上靴を落とし、玄関の方を見て、まるで全身を瞬間接着剤で固められたような心情で固まっていた。燕も工藤も、あんぐりと口を開けて固まっている。

「遅かつたじゃない」

そこにいたのは、髪をかき上げて「ふん」と声をならして立つている一条優花だった。

「まつたく、なにやつてんの？ セットと帰るわよ」

俺は残った理性を総動員させて、この現状に対しても最善の解決策を出すべく、瞬時に考える。そして、まもなく解決策を導き出した。この結果が これだっ！

「あ、そ、そうだな、帰るか一条」

そう、力ある者には逆らわない。もつとも安全な作戦だ。
でも、情けなさも倍増しである。まさに諸刃の剣？ って感じだ。
落とした上靴を拾い上げ、下駄箱に戻す。そして、すまないとお詫びを述べる。一条は、「まあ、いいわ」と、不機嫌そうに腰に手を当てて頷いた。

「龍弥ああああ！ ちょっと待てえええ！」

「な、なんだ？ つば」

「どういう事だ！ お前エエサボつてまかあの一條とワープラップなんて俺は認めねーぞ！」

「な、何言ってんだ！」これは……

そのままおひとした時、俺の目の前を何かがものすごい勢いで通り過ぎた。

「つむつむ！」

それは燕の顔面へとクリティカルヒットした。その何かは、燕の顔めりめりとめり込んでいき、勢いを失って地面へと落ちる。

「ぐはあ…」

「鞆……だよな？ 今の。あんなに重々しく顔にめり込むなんて、一体どんな速度で投げたんだよ。」

「ば、馬鹿な」と言つてんじやないわよ！ 鞆投げるわよ！

一条は、顔を真つ赤にして言つた。だが一條、お前は鞆を投げる前に、そのセリフを言つべきだったと思う。

「で、俺たちとの約束はどうあるんだ？」龍弥

燕の「骸を完璧に無視して、工藤は冷静に俺に問いかけた。俺はどうしようか迷つて一条の方を見る。すると、先ほどから一条は来なかつたら殺す、というコンタクトを一方的に送ってきていた。
どうやら俺には拒否権はないらしい。

「「」、「めん。一人とも、今日は一條と帰るわ。」「めんな、また明

田」

「そつか。何脅されたか知らないけど、がんばれよ」

「ああ、がんばるよ」

でも、一体何をがんばればいいんだよ、俺は。実際、どうして俺が一条と一緒に帰らなくては行けないのか、正直分からなかつた。

俺は、そそくさと昇降口を降りていく一条を追いかける形で歩いた。そして、綺麗な桜と校門を抜けて、破顔坂を下り始める。

「で、一体何の用だ。一条」

もう他人には聞かれないと思つた俺は、鞄を肩に担いで、一条に問い合わせた。

俺に問い合わせられた一条は、不機嫌そうな、心底鬱陶しそうな顔で返してきた。

「あんた忘れたの？ 言つたでしょ？ 探偵事務所を作るつて

「あれって、本気だつたのか！？」

「そうよ。何か文句もある？」

文句どころか、そもそも作る理由が分からぬ。

「いや、だから何のためにそんなもの作るんだ？」

俺がそう言つと、一条は俺から田線を変えて空を見て、そつと呟いた。

「偉大な事を成し遂げるためよ……」

さも当然のように、一条は言い切つた。だが、俺はそれが全ての人に自分の行動を聞かれたときに対する空返事のようなものだとうことを、恵里香から聞いている。

つまり、教える気はないってことだ。

「理由は分かった。だが、何故俺を選んだんだ？ 他にも友達ぐらいいいるだろ？」

「いいの。あんたに決めたんだから」

速攻で言い返された。そういうえば、一条の噂はよく知らないけど、そこまで出回っているって事は、友達って呼べる人も少ないのかも……。

「で、他にメンバーはいるのか？」

「ああ、それなら……」

一条はちらりと喫茶店を見ると、指を指して俺に言った。気が付けば、破顔坂の麓にある喫茶店のところまで降りてきっていたようだった。

「入りましょ？」

と言つて喫茶店へと向かっていく。
やれやれ、付き合つしかないのか。
俺は諦めのため息をつき、店に入った。

店内は広くもなく狭くもない何処にでもありそうな喫茶店だった。
別にレトロつてわけでも、真新しいとも言えない喫茶店。そこに、
俺と一条は入った。

「んで、メンバーは、俺と一条以外どうなつてているんだ？」

俺は店員に言われた席に移動しながら一条に聞いた。一条は、席に着き、肘を書いて一言。

「うん、決まつてないわ」

いや、決まつてないって。

「おい、どうするんだよ。何も決まつてないなら手伝えないぞ」

「いいじゃない、それともあのまま殺しておけば良かつた?」

いや、だからあれは確かに俺のせいだけど。

「わ、悪かつたって」

本当に申し訳ない。

「つていうか、何度も聞くけど、どうして俺が選ばれたんだ?」

俺は店員にコーヒーを頼んでから、一条に向き直る。

「いいでしょ! あんたに決めたつて言つているんだから!」

水の入ったコップを一条は思い切り叩き付ける。零れた水が、コップの周りに飛び散った。しかし、すぐにおしごりで拭くあたり、一条は元々礼儀正しい子のようだ。

「そんなポケモンみたいな決められかたされてもな

あくまで、俺は冷静に返す。

「第一、まだお互いの事も十分知らないだろ?」

そう、そもそも俺達は会つて半日経つか経たないかだ。まだお互に知らないことが多い。あつちはどうか知らないが、少なくとも俺は一条の名前以外は知りもしない。

そう言つと、一条は腕を組んで考え込む。そんな姿も結構知的な雰囲気をもちだしていて、一瞬見とれてしまった。だが、すぐに

答えがまだまつたのか、腕組みを解いて一一条は口を開いた。

「一一条優花。一六歳」

以上、血口紹介終わり。って、言いたげな表情で言われても……。

「いや、一いつとも知つてゐるんだが……」

俺のその言葉に、一一条の顔が蒼白になる。

「な、何で知つてゐるのよー。まさかあんた 私の事、隅の隅まで調べぬくしたつていうのー?」

「なんでもうなるんだよー。名前はクラス名簿に書いてあつたし、同じ学年なんだから同じ年だろーー。」

「…………」

「 それもそうね

「遅えよー。」

今氣付いたのかよー。

「で、あんたは?」

一一条は腕を組んで俺を見る。

「お、俺か? 俺は高野龍弥。お前と同一の年だ」

一一条と回じよつじ、名前と歳を名乗る俺。

「…………」

「えつ? 終わり?」

素つ頓狂な声を上げる一一条。

「なんだ? ビンカしたか?」

俺は讷づ言ひて、店員の持つて来たマーレーに口を付ける。

「いやいや、あんたの名前も歳も知つているわよ

「お前だって、それだけしか名乗つてないだろ？ なのこいつちだけ喋るワケない」

「そう言つと、一條はしぶしぶ頷く。

「そうね、なら……どんなことを言えばいいの？」

「どんなつて、そりや好きな食べ物とか、好きな事とか、家族構成

「」

「」

家族構成、その単語を聞いた途端、一條の顔が曇った。どうやら触れてはいけない琴線に触れてしまつたみたいだ。

まあ、聞くことはそれだけじゃないし、無理に聞く必要もないだろ？

「家族構成はいい。俺自体言いたくないしな」

その言葉を聞いて、一條は少し安堵したようだ。どうやら、お互に家族に関してはタブーがあるみたいだ。無理に聞くのも、そのせいで無理に問い合わせられるのも「免だ。

「そう わかったわ」

取りあえず、俺は家族構成の件については「これ以上考えるのはやめておいた。それはさておき、一條は俺に一つ確認をしてくる。

「ねえ、私が言つたら、あんたも私と同じ問いつけて答えてくれるのよね？」

「ん？ まあ、並大抵のことなら答えるよ」

さて、一条優花というのがどんな人物か、いろいろツッコミながら聞いてみるとするか。

「それじゃあ、改めて自己紹介をするわ。私の名前は一条優花。一

六歳よ。身長も体重も言わないわ」

「ぱつと見て、身長は一四〇後半だな

「つるさいわよ…」

ま、見ての通り身長についてはタブー、と。ま、体重については女子だし当然だけど、いくら何でもタブーまみれじゃなか？ 結局、未だに名前と歳以外は謎なままだぞ。

「さつきの続きからいくわよ。で、身長体重は言わないわ。女性の口からそんな事は言えないから。

で、好きな食べ物はオムライスよ

「うわつ、子供っぽいな」

「いちいち口挟むなああ…！」

人の目も気にせず、一条は立ち上がりて大声で怒鳴る。少ししてから、自分でもはしたないと後から思ったのか、急に大人しくなって一条は静かに小さく席に座る。

「悪い。冗談だよ、冗談。オムライスか……昼飯や晩飯の定番だな」いや、俺の家だけかもしけないけど、俺は滅多にオムライスなんか作つたりしない。

「まあ、いいわ。こういう場合は、私が一步大人になつてあげなき

や
「はいはい」

適当に流しておく。だつて、相手にすると怒るし。でも、何故だろうか。流してやつても一条の機嫌は悪かつた。むしろ、さつきよ

り怒ってる。どうしてだよ。

「嫌いな食べ物は、ピーマン、豌豆、カボチャ、キャベツよ。得意なことは、勉強全般、体育、つまり学校の教科全部ね」

は、初めて見たぞ。堂々と得意なことで勉強って言ひやつ。しかも全教科ときたか。

でも、そう言って文武両道っぷりをアピールした後だからか、何故か嫌いな食べ物の存在感がハンパない。ピーマンとか納豆って、小学生か、お前は。

「へ、へ、すごいんだな一条は」

俺がそう言ひと、一条は、えへんとふんぞり返る。こりこりと言いたいことはあつたが、これは言わなの方が無難だろう。

「じゃ、次はあんたが自己紹介しなさい」

一条が俺に向かつて指を指す。人に指さしかゃいけません。

「えっと、高野龍弥だ。お前と同じ年で、身長は一七〇。体重は正直言つて平均的だ。好きな食べ物は特になはない。強いて言つならクーリームシチューだな。嫌いな食べ物も特になない。得意なことは、シューTINGゲームだ」

「さて、自己紹介もこれくらいにして、話を戻すわよ」

「おい！ ノーリアクションかよ！」

「はいはい。よかつたわよー。とっても普通で

「なんだか全然嬉しくない言葉だなあー」

確かに、我ながら普通過ぎる紹介だと思つたけどさあ。

「さて、閑話休題」

一 条は、ほんと咳払いを一つ。

「話が逸れただけど、人員が足りないからあなたのほうで集めてくれない？」

「なんだよ、自分で言つといてメンバー集めは俺の役目かよ。いい加減だな」

「いいでしょ！ 私はそういうの苦手なんだから！」

「苦手？」

「……あ」

苦手って、つまりは人見知りか何かか。一条は、しまった！ と言わんばかりに動搖しているが、これは弱みを握るチャンスだ。まあ、今後のために覚えておくか。

「一條優花は人見し」

「そ、それよりあんた、家はどこ？」

俺の「一ヒー代を机に思い切り叩き付けて、一条は俺の声をかき消そうとする。

「どいつも、ここから街の方へ少し行つたくらいかな？ つて、いうか何でそんなこと聞いてくるんだよ」

俺は一条の代金をサイフに入れようと小銭を集める。

「今からあんたん家に行くからに決まっているでしょ？」

俺の持っていた小銭が、ものすごい勢いで吹き飛んで当たりに四散した。

豪快に小銭をぶちまけ、俺は小銭を拾つ」とすら眼中にはなく、田を見開いたまま硬直する。

いや、よくよく考えると聞き間違いだつたりするかもしねない。こ^レはもう一度彼女に聞いてみよつと思つた。

「な、何て言つた？ 今」

「だから、あなたの家に行くなつて言つたでしょ！ 聞こえなかつたの？」

までまで！ 話の内容が全く読めないぞ。なんで一条を家に案内しなくちゃいかんのだ。

「いや、だからどうして家に一条を招かなくちゃいけないんだよ」「いいでしょ？ 別に困るわけでもないのにグチグチと、本当に意氣地なしね！」

いいや、俺は普通の対応をしているだけであつて決して意氣地なしではない気が。つてか、普通知り合つて一回と経つてないやつを家に入れるか？ 普通。

そう内心で反論していると、一条の顔がまたもや蒼白になり、両腕で胸の辺りをさうと隠した。まるで、自分の貞操の危機を回避せんと言わんばかりに。

「もしかして私に変なことを期待しているの？ 馬鹿も休み休みにしないと死ぬわよ」
していない。

「するわけないだろ？ が

「しなさいよ！ 私だって女の子なのよー。ちょっとくらい興味持つてくれてもいいじゃないー！」
「どうひだよー！

「ど、どのみち知り合つたばかりの女の子を家になんか連れて
「もう！ なんでもいいから私を連れてけー！」

一条が思いつきり叫んだ。おいおい、客が思いつきりこっちを見て
るぞ！ 恥ずかしいからやめてくれ！

しかし、このまま抗議しても一条は下がる気はないようだ。……仕
方ない。俺は大きなため息をつき、覚悟を決めた。

「……分かった、来たいならついてこい」

「うん。分かればよろしい」

『機嫌が良さそうな事で。

第四話 少年は、少女の姿に過去を見る

「 じーじがあんたの家ね。想像していたのよりずっと立派じゃない」「 一条が驚きの声を上げる。いや、そんなところに声を上げられたって褒められた気がしないんだが。

駅まで続く国道から県道に入る。そして、そのまま住宅街へと進入すると、一番手前に建っている家が、俺の家だ。

三階建ての我が家。庭は平均的な広さで、手入れもされていない木が数本植えられている。門扉があり、その隣には黒いシャッターの付いた大きな車の車庫がある。しかし、そこに車はない。両親が帰つてくるときにだけ、そこは使用されるからだ。

「 で、来た時点でもう夕方の六時だぞ？ 俺の家が分かつたんだから、もういいだろ？ 家族も心配するだらう」

俺は、あからさまに疲れた声を出して言ひ。無理もないだろう。その後、なんだかんだ言って一条にゲーセンだの服だの靴だの店を連れ回され、ようやく帰ってきたのがこの時間。流石の一条も、疲れているだろう。

そう思つたのだが、俺の前に立つている一条の後ろ姿は、どこか悲しく見えた。

「 うそ、そうね……。やつするわ」

俺の言葉に、どこか寂しそうな声で一条は返す。

「 それに、あなたの家の場所も分かつたし、やる」ともないしね

付け加えて一條は言つ。その声にも、ビニが寂しきのよつなものが見え隠れしていた。

俺は、守れなかつた。

ビビットと、ノイズのような耳障りな音と共に、昔の俺の姿が一条の後ろ姿とダブつた。

俺は、この寂しさを知つてゐる……。

「一條……もしかして」

一條は俺に振り向く。そして俺は、一條の田を見る。
やつぱり、この孤独を思わせる瞳は、昔の、

「もしかして、一條。お前……独りなのか？」

俺は、そつと聞いた。

一條は、視線を俺から逸らして、そして空を見た。俺も空を見る。
……綺麗な、夕焼け空だった。

「うん……私、家から勘当されたから」

一條は夕焼けから暗い地面へと目線を落として答える。

俺には、彼女にかける言葉が出なかつた。俺はただ、孤独に佇む一條優花という少女を見ることができなかつた。

一條は、顔を上げる。そして、寂しさの漂う表情のまま笑顔を作

る。

「……ありがと、今日は楽しかつた。じゃあね。探偵事務所頑張つて作りましょ！」

腕を上げ、彼女は笑つて言つた。まるで、痛ましい夢の中のようないい表情で作る笑顔は、今にも割れてしまいそうな薄氷の上を連想させる。

じゃあ。と言つて、一条は家から離れて、沈む夕日の方向に向かって歩き出す。

今日の不幸の根源が、俺から速やかに離れていく。

「ま、待てよ！　一条」

なのに俺は、何故一条を呼び止めてしまったのだろう。

「ん、なに？　龍弥」

一条は少し寂しそうな笑顔でこちらに振り向く。

呼び止めたが、俺は一体何を言いたいんだ？ 探偵事務所を作ることに關してか？ それとも何故家に来たいと言つたのかを、か？ 違う。だって、俺には その悲しそうな瞳と寂しそうな笑みが作る重みを知つている。その辛さが、どれだけ自分の心を削る行為なのか知つている。

だから、その寂しさを孕んだ一条を呼び止めてしまったのだろう。独りぼっちの重みは、俺もよく知つていてるからな。

「ど、どうせ家に戻つても一人だろ？　俺、今から飯にしようと思つてたんだよ。よ、よかつたら、入れよ」

我ながら、不器用な言い方だ。

「えつ……でも、えつと……」

一条は、予想外の展開でおろおろとしている。

「ほーり、早く入れよ一条。せっかく来たんだ。何か振る舞わないと俺の気が済まない」

少しキザだつたが、笑みを浮かべて俺はそう言った。すると、その笑顔に一条は少し照れたようで、顔を少し赤らめながら頷いく。「全く、今日出会つたばかりなのに、夕食を『』馳走するとはな」俺は照れ隠すように独り言を言いつ。いつも女の方誘うのは恥ずかしいな、やっぱ。

「 でいい」

ん？ 一条が何か言つた。だけど、声が小さくて聞こえない。少し屈んで、耳を傾ける。

「何か言つたか？」一条
「だからー！ 一条じやなくて優花でいいって言つていいんでしょう！」
バカ龍弥！

いきなり大声で怒鳴つた。何で怒鳴るんだよ、しかもバカつて！でも、その顔は怒つているようだが、何故か俺はその顔に安心した。今の一 条の表情は、俺が今日一日で散々見た我儘顔だつた。

「んじゃ、わざと家に入れ。ゆ、優花」

やはり、女子を下の名前で呼ぶのは、抵抗があるな……。
あ、ちなみに恵里香は幼なじみなんで除外。

「ん、分かつた。バカ龍弥」

そう言つた優花の顔の顔は、とても小さな幸せが見え隠れしていたのだった。

第五話 俺と彼女とおはなわ~と (前書き)

(・・・・) 1Jにつが出現すると、シーンがかわります

第五話 俺と優花といふやうなこと

まあ、その後夕飯を「」馳走する」となったのだが、家には食材がほとんど無かつた。

それもそのはず。さつきは思わず啖呵を切つたが、本当は今日の学校帰りに夕飯の材料を買つつもりだったのだ。しかし、優花に街中を連れ回されたせいで、すっかり失念してしまっていた。

「ん~、どうしようか

俺はほぼガラガラの冷蔵庫を見て唸る。

「ねえ、夕飯まだ~？」

リビングでは優花がうなり声を上げている。

「ああ、ちょっと待つて。今から買い出しこ行ってくる

俺は買い出しの準備をする。すると、またもやリビングから声。

「ねえ、じ馳走するって言つて、なんで今から買い出しなの?」「仕方ないだろ。本来なら帰りしに買い出しこ行くつもりだったんだから

リビングのソファーに寝転がっている優花に言ひ。つていうか少しは遠慮じろよ、なんでもうへつりいでんだよ。

「お前、少しは遠慮じろよ

優花は腕を置く場所に足を置いて寝転がっている。休日のサラリー
マンか、お前は。

「いいじゃん、別に」

「おそれく、こいつは何度言つてもおそらく聞かんだろう。

「分かつた、それじゃすぐに戻つてくるから散らかすなよ

「そう言つと、俺は玄関に向かう。その時、優花が俺のこと呼んだ。

「ねえ龍弥、少しいい？」

「なんだ、一じょ、じゃなかつた、優花」

やつぱり、まだ名前で呼ぶのはやつぱり抵抗がある。
優花は俺とは目を合わせずそつと言つた。

「あんたも、独りなの？」

その言葉は、俺の家の状況を見て言つているのだろう。両親も兄弟もない。自分という中身だけを守つとしている、この貝殻のよつな家を。

「……どうだろうな、確かに両親は海外に出張中だし、妹弟は全員死んじまつたけど、一人じゃないと思ひや」

「どうして？」

「どうしてって、そりゃいろんな人が俺の周りにいるからな。恵里香に燕、工藤、それに今日から……ゆ、優花もな！」

そういうと、何故か優花は顔を赤くして、でも少し安心したように

小さく、そう、とだけ言った。

「それじゃ、行つてくるから留守番頼むぞ」

俺は買い物袋を持つて玄関へと向かつ。

「い、こつてらっしゃい」

随分ぎこちない、その「こつてらっしゃい」に俺は、ああ。とだけ返した。

ピーンポーン

なんだ、この空氣をぶち壊しかねん、といふかもうすでにぶち壊したインターホンを押した馬鹿野郎は……。

急いで玄関に向い扉を開ける。そこにいる奴は、俺が想像した顔だつた。

「よひ。いい展開になつてゐると思つてムードぶち壊しに來たよ

そこにはいたのは、黒のパークーを着た恵里香だつた。相変わらず、黒の服と亞麻色の髪がよくマッチしている。

「何しに來た。てか、どうして優花がいる事を知つてゐる?」

「いやん。優花だつて。たつた一日で、どうやら一人は恋仲へと落ちたようだな」

しまつた。本人の前ではまだうまく言えないのに、他人の前で何の臆面もなく言つちまつなんて!

「ち、違うんだ！」「これは優 ジゃなくて、一條がそう呼べつて」

「分かってるよ。第一、リュウにそんな度胸がないのは知ってる」

チキンで悪かつたな。それに、俺は優花みたいなちびっ子に興味はねーよ。

もっと、こう グラマスでスラッシュした大人のお姉さんが

「で、どうしてお前は俺の家に一条がいるのを知っている？」

くだらない妄想を、脳内で斬鉄剣を使って真っ二つにしながら、俺は恵里香に聞いた。

「だつて、一人が玄関でいちやついてたのを窓から見てたからな」「な、なんだつてー！」

「それで、家に入った後も見てたけど 買い出しにも行つてないんだろ？ だと思って、一応カレーの食材を持ってきた。感謝しろよ～」

恵里香がヒラヒラと手を振つて、カレーの食材が入つてているもう袋を渡してきた。

「んじゃ、頑張って一條さんの面倒見るんだぞ」

そう言って、恵里香は自分の家へと戻つていった。なんたつて家が隣だからな。

「まつたく、せわしい奴だ」

そして、イイ奴でもあるけどな。

俺は、恵里香から受け取った買い物袋を見た。ルーや人参。ジャガイモに玉ねぎ。たしかにカレーの食材一式が入っていた。

「ねー、龍弥、誰だつたの？」

リビングから優花の声が聞こえる。どうやら訪問者が誰かは聞こえてなかつたらしい。まあ、そのほうがありがたい。説明するのも面倒だし。

「ああ、隣のおばさんからカレー材料一式貰つたから、今夜はカレーダゾ」

俺はそう言いながら玄関のドアを閉めて、キッチンへと向かつた。

「誰がおばさんだ、『ワフア！』

隣の家から何か聞こえてきたが、優花の耳には届いていなかつたみたいだ。

(、 、 、)

「ん！ おいしい！」

優花がカレーをスプーンですくいながら言った。なんたつて料理には少しばかり自信がある。伊達に一人暮らしはしていない。

「あんたはいいわよね～。こんな料理を作れるんだから

優花は、半分ほど食べたカレーを一旦置いて言つ。

「おいおい、お前も一人暮らしんだ？ 料理ぐらい出来るだろ？」
「よ、世の中には料理の不得意な女性だつているのー。」

優花は顔を赤くして言った。あ、そつか、お前料理が、

「できないのか」

「うぬうああああああーー！」

悲鳴と同時に発生するパンチの当たり判定に俺は巻き込まれる。ふん、と優花は鼻を鳴らす。今朝も思ったことだが、『イツの攻撃力は高校二年の女子生徒のそれを軽く凌駕している。』手でもしてんのか？

殴られた頬をさすりながら、俺は優花に聞く。

「でもさ、それならお前は今までどうやって飯食つてたんだ？」

「よ、世の中にはコンビニとつ天竺があるのー。」

お前の「つ天竺」は、百円でおにぎりが買える店のことだったのか。
そりゃ三蔵法師も楽ちんだな。

「でも、そんなんだつたら栄養偏るだろ？」

「いいもん、別に気にしないから」

カレーの残り半分を平らげ、スプーンを皿の上に置いて優花はぶつきらぼうに答える。

「いや、毎日飯作つてこる俺からすれば、それは健康を損ないかねないこじだ。」こはけやんと注意するべきだろ。

「いいや、俺が気になる。第一、そんなもん食つてこるから身長と

か胸とか
」

「つるさああああい！ 死ねえええ！」

コンボアップを2つ装備した優花の三連撃に俺はなすすべなく倒れる。ちなみに攻撃は、パンチ、パンチ、キックの某スニーキングミツションの達人の蛇が最も得意とするコンボだった。

俺を倒した優花は、キッチンへと食器を運ぶと、そそくさと玄関へと向かっていった。

もう帰るのか、と思いつつ、俺も起き上がって見送りに出る。

「今日はありがと」

優花は、靴を履き終えると立ち上がり言つた。まだこいつに殴られた頬が痛む。俺は、自分の頬をさすりながら優花を見る。

「ああ、お互い似たような境遇だし、困つたらいつでも来い。いつでも助けてやるぜ？」

努めて明るく言つた。俺は、もう誰にもあんな顔をしてほしくはない。それが、たとえこの自分勝手で唯我独尊の一条優花でも、だ。

「うん、ありがと」

いい笑顔だった。そこには、あの時の寂しい瞳はなかつた。

「本当に送つて行かなくていいのか？ 最近ここいらで通り魔殺人つてのがいるらしいし」

「うん、思ったより家が近いから大丈夫よ」

どうか、とだけ言つて俺は玄関を開ける。

「思ったより優しいのね」

「まあ、人並みにな」

その玄関を優花は通る。門扉を通つて、彼女は家の外へと出た。
俺は優花に別れの挨拶をする。

「それじゃ、また明日な」

「うん、また明日」

そう言つて、優花は帰つた。

今日は、なんだか濃い一日だつた。探偵事務所を作るとか言う変な奴に絡まれ、そのうえ飯まで作つて一緒に食べた。

今思えば、家で誰かと一緒に飯を食べたのは久々だつたような気がする。どうして気が付かなかつたのだろうか。なんだか、まるで優花と飯を食つるのが当たり前のような気さえしていた。

「でも、まあいつか。友達が一人増えたようなモンだし」

向かいの道を渡つて、優花はゆつくりと歩き始める。
俺はその姿が見えなくなるまで見送つた。

第六話 長い一日 前編（前書き）

中途半端なところで終わっていますが、どうぞ承ください。

第六話 長い一日 前編

ふと、目が覚めた。予想以上の快眠に、俺自身が驚きながらも、天井を見る。

あの目覚ましが鳴つていないとことは、まだ起床時間ではないということだ。俺は、タオルケットを再び被つて意識を飛ばそうとする。

だが、ここで俺の携帯が、目覚ましの代わりに快音を鳴らし始めた。一体誰だ？ こんな朝早くに

「燕か、それとも恵里香か？」

俺は携帯を取り、着信の相手を見る。しかし、その電話番号は俺の見覚えのないものだった。俺は訝しみながらも一応電話に出る。

「は～い、もしも

「遅い！ 一体どれだけ待たせるのよー！」

携帯の出せる最大音量で女の子が怒鳴り込む。俺は反射的に耳から携帯を遠ざける。あまりの大音量に、一瞬鼓膜が破れるかと思った。でも、この声……どこかで聞いたことがあるぞ？

そう思つてすぐ、昨日俺の家で夕飯と一緒に食べた少女の顔が思い浮かんだ。

「その声……まさか、優花！？」

「そうよ。なんか文句ある？」

「今まで、なんだ？ いきなり。つていうか、いつ携帯番号をお前に教えた！」

「うつさいーとにかく、今すぐ学校に来なさい！」

そう言つて優花はブツツ！ つと携帯を切つた。

切れた電話の「ツー、ツー、」という音を聞きながら、俺は大きなため息をつく。

従わなければ、何をされるか分からん。それから、わが身大事と悟つた俺の行動力は迅速なもので、十分で支度をして、全力疾走で学校に向かつた。だけど、着いた頃には七時を回っていた。

校門前に着くと、遠目からでも怒りを抑えているのが分かる優花が、門の横にある学校の表札の前に立つていた。

「お・そ・い！」

「そんなにはつきり言わんでも分つて。だから全速力で走つてきただろ。それに何時だよ、俺の携帯の番号知つたの」

「昨日強制拝借させてもらつたのよ」

俺に人権はないのか。

「んで、こんな朝早くに呼び出して一体何の用だ？」

「それは、今から教えてあげるわ

と言つて、優花は校庭の方へ歩き出した。一体この先に何があるんだろうか？

運動部の朝練は七時半以降の決まりだったはずなので、校庭に人の姿は見あたらない。

無人の校庭を俺達は横切つて、何故か体育館裏に來た。

「お前、俺をここで消すつもりか？」

俺の率直な感想を優花に言つ。

「違つわよ。アレよ、アレ

優花は、やう言つてここから部活館を指さした。

部活館といつのは、吹奏楽部や手芸部などの屋内で活動する部活が使用する部室だけで構成されている三階建ての建物で、体育館の裏側にある。俺は帰宅部だから、一年の学校の校舎位置を確かめるときに一度入ったきり以来だ。

「んで、部活館に一体何の用なんだ？」

「まあ、見てからのお楽しみよ」

すがすがしい笑顔で優花は言った。

そして部活館の三階。漫画同好会の部室の隣の部屋の前に、俺は向かわされた。

まあ、ここまで来るとさすがに何がどうなつて立っているのかが、ぼんやりと分かつてくる。

「まさか……優花」

俺は頭一つ小さい優花の顔を見た。すると、優花も俺の顔を見て、フフッと笑う。

「そう、こゝが！　私の探偵事務所！」『一条探偵事務所』の事務所になるのー！

な、なんだってー！

「や、そんなことあるか！　だつて立ち上げを決めたのは昨日だぞ！？」

俺は取りあえず、この現状を否定したくて言つたが、優花はそんな幻想すら一言でぶち壊してくれた。

「うん、だからあなたが昇降口に来るまでの間に、登録と部屋の準備はさせといったのよ」

なんとうとう速さだ。俺は優花に屋上へ呼び出されてから一分で教室へ戻り、すぐ帰る支度をして一階に行つたの。元。

「でも、他の部員はどうするんだ？ 第一、部員が五人以上いないと部は作れないぞ」

そうだ、この高校では部、もしくは同好会を作ること、最低でも五人以上の部員がないと登録できないのだ。なのに優花はどうやって登録したんだ？ 現在の探偵事務所の所員は、俺と優花の二人だけだというのに。

「そうよ、だから部員は明日連れてくるって言つたの」

優花が当然のように言つた。おい、後の三人はどこから沸いてくるんだよ。

「どうするんだよ、そんな守れない約束して」

「無理じゃないわよ。何でもやる前から無理なんて言わないの」

そのセリフは使い時を完璧に間違えている気がする。

「じゃあどうすんだよ」

俺は優花に問いかける。

「あんたの仲間から引っ張つてくれればいいじゃない」

なんだ、その強引な解決策は。

俺はため息をつき、そして優花に面と向かって言った。

「俺だって、友達が多い方じゃないんだ。それに、探偵事務所なんて、あいつらが食いつくはずがない」

「そう。でも、あんたのお仲間なら、頭がいいから勘織つてくるわ」

なんだか嫌な予感がする。

第七話 長い一日 中編（前書き）

今回は、推敲せずに、応募した時のままの投稿となります。『容赦ください。（・・・）』シーンが変わる時に出現します。

第七話 長い一日 中編

あれから少し経つて、俺達は自分のクラスに戻った。その頃からクラスメイトがちらほらと現れ始めた。

俺は優花と別れてから、図書室で好きな本を読みながら考える。やはりこんな話をあいつらにするのは止しておこう。それに、集まらなきや探偵事務所は空中分解するわけで、俺も晴れて自由の身になれるのだ。

そう結論付けた俺は図書室を出て教室へと向かう。その途中で、今登校してきた燕と恵里香と会つた。一人とも俺を見つけるやいなや少し怒った顔で俺の方へと近づいてきた。

「まったく、何で先に行つてんだよ。携帯にメールしても出ないし！」

恵里香が腰に手を当てて言つた。そう言えば連絡してなかつたな。

「わ、悪い。連絡するの忘れてたんだ」「ホントだぞ、龍弥。まったく、一人で行つたのか？」

三人で教室へと入つて、燕の氣だるそうな台詞に答える。

「いや、優花に呼ばれてな」「な、なんだとー！　お前は、俺たちより一條を優先するのかー！」「しようがないだろ、朝六時半に叩き起こされたんだからさ」

俺は一番奥の席で窓の外を眺めている優花を見ながら言つた。俺と優花の目が合つた。ヤバイ、なんかすっげー睨んでる。まさに今、探偵事務所のことを言い出せ、と言わんばかりにこちらを睨んでいら

つしゃる。

「ン? どうしたんだ、リュウ」

俺はそんな恵里香の言葉で我に返る。しかし、勧誘をしなければならない事態は変わつていなのが現実だ。

「しようがないな……」

俺は諦める。仕方ないので、俺は恵里香と燕に探偵事務所の設立に携わらせられたこと。そんなこんなで部員が足りないので集めろ、と優花に強制させられたこと。それで一人に部員になつてくれと頼んでいることを説明した。

説明し終えると、一人は話を吟味し始める。

「フーン、大体話は分かつたぞ。んで、ワタシ達にその事務所に入つて欲しいと……」

「そ、そななんだ。別に無理にとは言わないから」

「そうか。分かった」

燕と恵里香は話を理解して頷く。

「で、どうだ?」

俺は一人に聞く。まあ、正直聞くまでもない気もする。だつて、探偵事務所だぜ? 別に名探偵の金一がいるわけでも、バーローが口癖の小学生もいるわけでもない、ただ自らのワケのワカラん目的のためだけに立ち上げようとしている探偵事務所だぞ? そんなの誰が進んで入るなんておもて、

「イイゾ」

「いいぜ」

「うん、氣のせいだろう。なんか一人から予想外な回答を聞いた氣が……。」

「だからイイって言つただろ？ 話聞いてないのか？」

恵里香が不格好な蛙でも見るかのよつた目で言つた。

「な、なんでだよ！ 僕はお前達に関わつて欲しくないんだよ！」
「そりやワタシだつて、関わりたくないさ。でも、我が身大事とい
うか

「けど、一條なら俺達がこのつて言つ」とくらゐ分かつてゐるはず。
それでも龍弥に勧誘させたつてことは、断つたらそれ相応の『何か』
を、俺と恵里香にしかすつもりだつてことだらう？ そんなの、
俺も恵里香も」めんだ

燕がこちらを見ている優花を見ながら言つ。そして優花もばつの悪
そうな顔をする。

「 にやつ」

表情を言葉で言わんでも、お前の考えていた事は分かつた、優花。
つまり、優花は自分の校内での評判を逆手に取つたつてことだ。
何をしているのか分からぬ。何をしでかすか分からぬ奴の話を
断るのだ。その後にどんな仕打ちが待つているか分かつたもんじや
ない。燕は要領がいいから、勘織り過ぎたんだ。

何も無いのに、何かされると燕は思つたんだらう。

「結構頭いいのな。優花は

そんな事を考えていると、担任の岡山が入ってきた。

「お~い、HRを始めるぞ~。席に着け」

その声が聞こえると、立ち歩いていた生徒や話していた生徒が席に着く。俺達も急いで席に着いた。

「あれ、俺の隣に席がある……」

どういふことだらうか。俺の左側の席。つまり学校を支える柱の影にある机は、その柱と黒板の位置の関係で、黒板が少し見づらいのだ。だから、ここには席は存在しないはずなんだけど。

そんな俺の疑問をよそに、先生は教壇に立つて全員を見渡す。すると、急に顎を緩ませて皆に告げた。

「今日は、みなさんに転校生を紹介します」

周囲が一気にざわめく。

ん？ そんな話は聞いてないが。第一、転校生が来る場合は始業式の日に来るのが当たり前のようつの気がする。

「先生、なんで昨日じゃなくて今日なんですか？」

俺と同じ事を考えていたのか、燕は手を挙げて先生に聞く。

「ん？ ああ、本当は春休みの初め頃から引っ越しては來ていたんだが、転校生の子は体が弱くてな。体調の関係で昨日は学校に顔を出せなかつたんだよ。さ、入ってきなさい」

みんなは開きっぱなしになつた教室のドアに視線を送る。一体どんな転校生が来るのか。男なのか、それとも女なのか、美人なのか不細工なのか。

俺も当然そちらの方へ意識を向ける。

「し、失礼します」

外から控えめな言葉と共に入ってきたのは女の子だった。しかも

……

「め、めちゃくちゃ美人……」

男子全員が同時に漏らした。もちろん俺も。

入つて来た女の子は、優花に負けず劣らずの美少女だつた。優花ほどの長さの黒髪を後ろで一つに分けている。ツインテールではなく、降ろした髪を白い紐で括つていて、昔の日本のお姫様を連想させる髪型だ。そしてモデルのような細いスレンダーな体つき、身長は平均的な高さで、なにより守つてあげたくなるような優しさが伝わつてくる。

「それじゃ、自己紹介を……」

先生にうながされて小さく、ハイ、と返事をして彼女は黒板の真ん中に立つた。

「えつと、か、加納綾です。宜しくお願ひします」

「じさまさとした自己紹介にもみんなは拍手をする。

「席はJの高野つて子の隣だからな」

と言つて、先生は俺の隣の席を指わす。そつか、Jの席は加納さんの席だったのか。

加納さんは、申し訳なさそうに席に着く。その時、俺と一瞬目が合ひ。

「よ、ようしきくな、加納さん」

「えつと……。よ、ようしきにお願いします。高野君」

やべえ、近くで見ても綺麗だ。

それから先生の連絡が始まる。内容はどれも、最近現れた連続殺人についてだった。まあ、五人も殺されれば学校側も警告やら何やらしないといけないもんな。

「これで、HRを終わるぞ。委員長ー。」

先生の一言で、つかの間の休み時間になると、転校生の最初のイベントである質問攻めタイムの始まりだ。クラスの明るい女子が一気に加納さんの席を取り囲む。

「ねえねえ、どつから来たの？」

「ねえねえ、家族構成は？」

「アドレス交換しようよ」

この手の攻撃は誰でもたじたじになる。案の定、加納さんもたじたじになつていてる。

まあ、これも転校生としては仕方ないことだ。

「いやー、最初はビックリしたぜ。なんせ転校生だからな」

燕が後ろを向いて話しかけてくる。

「まあ、今は気のしても仕方ないだろ？ それに。なあ龍弥、いいこと考えたんだが」

いかにも悪巧みをしていと言わんばかりの悪人ズラで燕は顔を近づける。

「なんだ、一体……それに顔が近い、離れる」

燕はフフン、と鼻を鳴らして腕を組み、待っていましたと言わんばかりに見栄を張る。

「あの加納綾を探偵事務所に入れてみないか？」

またか、いい案とこいつのはこの事だらうか。

「断る」

「いや、何故断る」

何故今日転校してきた子を変な探偵事務所に監獄しなければいけないんだ。もし、勧誘して入部してしまえば、彼女の高校生活は早くも玉碎してしまつだらう。

「じゃあ、何で加納さんを入れなきゃならないんだよ」

俺は、一時間田の用意をしながら言った。その横ではまだ加納さんに群がる女子生徒達が黄色い声ではしゃぎ回っている。

「だつて、考へてもみろよ。まず、女子部員のメンツは？」
「メンツつて、まず優花だら、それに恵里香だら？ それがどうした」

つていうか一人しかいないけど。

「そこに加納が加わると、一体どうなる？」
「何にも起こらねーよ。何かモンスターでも召還されるのか？」
「なんと！ 美少女トライアングルが完成するのだ！」
「な、なんだつてー（棒読み）」
「美少女、そしてトライアングル……。なんて甘美な響きだ。甘すぎて糖尿病になつちまいそうだ！」
「糖尿病でも心臓病でも勝手になつてろよ」
「そして、そのトライアングルの中に足を踏み入れる。すると」「おい、燕。そろそろ現実に戻つてこ」「やうすると俺たちは、もとい！ 俺はモテモテになるのだ！ ウヒョー！ やべえ、興奮してきたぞ。テンション上がつてきたー！」
ダメだ。俺の声は聞こえない。なんだかワケの分からぬ言葉を繋げている。奇妙なうえに、じつが探偵事務所に入った理由が何となく分かつた気がする。
しかたない。今の燕を止めるにはこの言葉しかないのか。
「 分かった、その代わり条件がある」
「よし、それで？」
いきなり真面目な顔で椅子に座つてこちらを見る。今の通り燕は、イケメンの変態である。読者のみなさん。よく覚えておいて下さい。
「お前が誘つても優花が認めなかつたら意味がないだろ？ だから

優花に勧誘させるんだ」

「いいだろう。その条件飲んだ。それじゃあ、もし一条が勧誘をニスつた場合は俺が探偵事務所から出て行つてやる」

いまいち燕のペナルティがよく分からなかつたが、計画通りだ。

俺があいつと少しの間いて分かつたこと、それはあいつが初対面の人とは喋られないということだ。

俺のように、怒鳴り、蹴飛ばし、罵声を浴びせたことのある相手ならOKなのだろうが、喫茶店であいつは致命的な弱点を俺に見せてしまつたのだ。

これなら、いくら部員が欲しくても言い出せずに終わり、他に宛もなく探偵事務所は空中分解するだろ？ これで今まで通りの生活が戻つてくる。まさに策士な計画。

一時間目が始まり、先生が入ってきたので、この続きは放課後⋮つまり、締め切りギリギリにした。これで、この馬鹿げた物語ともオサラバできる。

そんなこんなで一時間目の休み時間、俺は優花に例の話をした。

「な、なんでそんなことしたのよー！」

案の定のリアクションだ。俺は構わず続ける。

「なんでだ？ 勧誘するんだぞ？ いい事したと思ったんだけどな

俺はわざと悪人ズラで答える。

「あんた……私が人見知りするの知つて約束したでしょ！」

ああ、知つてないとこんな事を約束したりはしねーよ。

「けど、この学校にはもう勧誘しても掛かる奴がないだろ？ なら、どのみち声を掛けるしかないんじゃないか？」

「ぐつ……。わ、分かつたわ。絶対勧誘してやるんだからー！」

ずっと下だと思っていた俺からの反逆にわなわなと震えながらも、優花は俺の提案に頷いた。

すまないな。俺はお前と友達でいたいんだ。その意味不明な部活仲間としてじやくなくな。

(・・・)

そして、退屈な授業は終わり、遂にエラまでもが終了し、放課後がやって来た。

俺は加納さんが帰る前に声を掛ける。ここまで優花にせりせるとだ。俺が舞台ぐらい作ってやらなこと。

「なあ、加納さん。ちょっとこいか？」

加納さんは帰ろうと鞄に荷物をまとめているところだった。彼女は顔を上げてこちらを向く。

「な、何ですか？ 高野君」

「ああ、ちょっと言いたいことがある奴がいてや。ちょっと屋上まで来てくれないか？」

普通にそう言つたのだが、加納さんは少し齧えた表情になつた。
何かしたつけ？ 俺……。

「あ……わたし、何か悪い」とでもしましたか？

か、勘違いされてる！

「ち、違う！ 加納さんに話を聞いて欲しい女の子がいて、そいつに頼まれて聞いていいんだ！」

「そ、そうですか、安心しました」

勘違いに気付いたのか加納さんは胸をなで下す。

「それじゃ、来てくれるか？」

加納さんは返事をして、俺は屋上へ案内した。
よし、あと一步。あと一步で終わるー

第八話 長い一日 後編（前書き）

長いです。でも、頑張って読んでください！

第八話 長い一日 後編

重い鉄の扉を開けると同時に、穏やかな春風が薄桃色の花びらを運んできた。俺は、その穏やかな風と夕日に眩い思いをしながらも、彼女を扉の先へと通した。

ここは北館の屋上。昨日俺が優花に連れてかれた屋上だ。

加納さんの艶のある黒髪がゆるりと靡く。俺は、そんな彼女の目線の先を見る。

傾く夕陽を眺める影が一つ。桜の花弁と共に靡く髪は、長く美しい。夕日に反射する銀の手摺に手を置き、優花はただ一人その時を待つ。

「約束通り連れて來たぞ。後は、お前次第だ」

俺は優花にそつと、扉の横の壁に背を預ける。

加納さんは少し前へ進み、優花に聞いた。

「一条さん……ですよね？　お話しで一体なんですか？」

そう問い合わせられて、優花はよつやく振り返る。けれど、視線は加納さんを見ていない。というより、恥ずかしさのあまり見れていない。

「えっと、その……」

「…………」

加納さんも黙つて優花の言葉を待っている。お互いの長い黒髪が靡く様だけが、時間の経過を物語つている。

「あの……お、お願ひがあるんだけど」

ようやく優花が口を開く。そう言ひ声は、少し裏返つてゐる。おいおい、聞いてるこつちまで緊張してくるじゃねーか。

「は、はい……。なんですか？」

「わ、私ね、探偵事務所を作ろうとしてるんだけど。よ、よかつたら入つてみない？」

直球。ストレートに、優花は加納さんに内容を伝える。でも、加納さんの返事は即答ではなかつた。氣まずい沈黙が数十秒続いてから、小さい返答が耳に入った。

「……ごめんなさい。わたしは、人助けなんてできる人間じゃない、です」

やつぱり。常人ならそういう判断をする。残念だつたな、優花。優花が煮え切らないといった表情で地面を見る。加納さんは、それで呼び出しが終了だと思ったのか、別れの言葉を優花に告げた。

「それだけなら、いいですか？」

「ツ……待つて！」

踵を返して扉へと向かおうとする加納さんを、優花が止めた。優花の表情は必死で、どこか悲痛の色を滲ませている。

加納さんは少し鬱陶しげに眉を顰めると、振り返つて優花を見た。

「まだ、何か用ですか？」

「どうして、あなたもその目ができるの？」

ん？ 目？ 一体何のことだ？

「あなたの目、私や龍弥と同じ寂しさを知つた日……」

俺や優花と……同じ？

「なんのことですか？」からかわないで下さい」

加納さんも意外なことを指摘されたのか、声に焦りがあつた。優花は、それを無視して続ける。

「私も。いいや、そこにある龍弥にだつて分かる。その寂しい目
が、どれだけ辛いことを経験しなきやできないのか、私は知つてゐ
！」

優花は半ば叫びながら言う。その聲音が。
想いが。昨日の玄関前
での優花を想起させる。

だが、加納さんはそれが不愉快だつたようだ。

「あなたに何があつたのかなんて知りません。そ、それに、わたしはそんな経験したこともありません！」話が終わつたなら帰ります

1

今までになくしっかりと加納さんはない。俺の横を通り過ぎ、ドアに手を伸ばす。

私は中学二年の時、親に勘当されたの」

辛い記憶を語る優花の顔が、苦みを訴える。一瞬だけ風が止み、同時にドアノブへと伸びていた加納さんの右手も止まつた。

して捨てられること。

俺も、それぐらいのことは知っている。

「……私の本名は藤原優花。名家藤原氏の末裔だったの

その言葉に、俺は驚愕する。

藤原。平安時代に栄えた貴族。中臣鎌足から始まつた歴史に名を残す名門中の名門。

歴史に名高い藤原家の生まれの少女。優花、お前本物のお嬢様だったのか。

「知ってる？ 一條つていうのは、藤原の分家の名。つまり、私はもう必要ないのよ。京都からこの岡崎市まで飛ばされたの。知らない土地で、知らない人達の中でいきなり一人で生活しろ。って言われたのよ」

優花の語る声は自嘲氣味で、愚かな子供を嘲るような声だった。

「お金には困らなかつた。けど、家族との絆も、友達も、大切な物をも全部消えた。残つたのは、抜け殻のようになつた私だけ。学校でも馴染めず、一学期にはクラス内に私の居場所はなかつた。だから、私は暴れた。私の悪口を言つ奴は殴つた。何時しか、学校中の人が私を避けていた。家に帰つても、温かく迎える家族は居ない。騒がしかつた妹達も居ない。もう、何もかもがどうでもよくなつた

聞いている内に、あの時の優花の笑顔の意味がようやく分かつた気がする。ひどい孤独を抱えた者の笑顔。痛みを曝け出す自傷の表情。

優花、やっぱりお前は……

「けど、半年前に父親から電話が来たの」

どこか遠くを見ながら優花は語り続ける

「何か、人として偉大なことを成し遂げる、そうすれば勘当をナシにしてやる。つてね。私は約束したわ。『半年以内に、なにか偉大なことを成し遂げる』と、父親にね。それから私は考えた。一体どうやって？ 一体何をして？ 私は考えて、みんなから変人呼ばわりされても考え、行動した。そして思いついた。探偵事務所を作ろうってね」

。 そうか、全てはこのためにつて事か。だから、あそこまで強引に

「もう、約束の時間まで一ヶ月を切ったの。もう、時間がない」

すると、優花は俺の方を見る。視線が合う。

「その龍弥には昨日会ったの。こいつだけは、私を避けずに、なんだかんだ手伝ってくれた。初めての人よ」

照れくさくなつて俺は下を向く。そして、同時に後ろめたくもなつた。

僕は手伝つたところか、こいつをつて優花を追いつめていたのだから

「あと、一〇分で最後の部員を連れてこないと、探偵事務所は解散しちゃうの」

「あなたに、どんな手を使つても入部して貰おうとは思ひてない…」

「ゆる」がはじ

T

「あなたに、どんな手を使つても入部して貰おうとは思つてない……」

…。けど、その代わり、一つだけ私のお願ひを聞いて欲しいの

「何、ですか？」

沈黙を貫いていた加納さんが、静かに聞き返す。すると、優花の視線は再び俯き気味になつた。

「わ、私には、女友達なんて一人もいないの。だ、だから、その…」

…

顔が真っ赤になりながら、声を振り絞つて優花は頭を下げる。

「わ、私と友達になつて下さい…」

思いもよらない告白。加納さんだけじゃない。俺だつて、優花が唐突にお友達になりましょうなんて言い出すなど、予想だにしてなかつたぞ。

優花にそう言われた加納さんは、踵を返して、無言で出て行こうとドアノブを回す。ドアを開け、ドアの向こう側へと足を伸ばす。さて、どうしたもんか。優花は自分の過去を語つて、加納さんは断つてこの場を去ろうとしていて、何もしていなければ俺だけ。そりやそうだ。俺は最初からこの二人の会話に交わる気なんて無かつたんだから。

でも、このまま加納さんを帰していいのか？ 別に探偵事務所云々は断つてくれてもいい。優花は俺の事を良い風に言つていたが、俺も正直なところ面倒事は嫌だ。

でも、俺がこの場で加納さんを見過ごしたくない理由は別にある。

「なあ、加納さん」

俺の言葉に、加納さんが足を止める。

何故、二人の会話に交わる気が無いと言つた俺が、加納さんを呼び止めたか。

その問い合わせに対する答えは、すぐ簡単に潔だ。

俺は、頭下げてまで友達になつてくれと言つた優花が、変なヤツだと思われてしまつのが、どうしようもなく耐えられなかつた。

「俺もな、最初は……いや、さつきまでこのまま加納さんが断つてくれればそれでいいと思ってた。平和な学校生活が戻つてきてそれで終わりでも良かった。けど、俺は思ったよりお人好しみたいでな。俺も結構ひどい目に遭つてきた。だから、優花をほつとけないんだよ。加納さんも、話し相手になるだけでもいい。あいつと友達になつてやつてくれないか？ 俺からも頼む」

俺は加納さんの方を見ない。それは加納さんも一緒だろう。視線を感じない俺は、ただ沈もうとしている夕日だけを見つめる。

「龍弥」

優花の儂いこれが、俺の鼓膜を刺激する。

風が、止んでいた風が再び吹き始めた。それは、いたつて自然なことだ。普段なら、そこに感慨なんて抱かないだろう。でも、でも俺は、全てが動き始めたのではないかと思った。

「……わたしは、昔、小学校に行つていたときに病気で入院しました。そして、同じ病室の女の子から虐められて、心が病んだ時期があるんです」

今まで夕日を背にして黙つていた加納さんが、唐突に語り出した。

「それから、退院してもしばらくは人形みたいになつて、その頃に

付いたあだ名が『操り人形』だったんです。それ以来、精神も安定して昔のように元に戻った後も、その名前で虐められ続けました

何も、誰一人として声を出さなかつた。

「高校二年になつて、わたしは遠い学校 つまり、この岡崎高校に来たんですけど、正直不安だったんです。小学校以来、まともに友達なんて出来たこともないわたしが、楽しい高校生活が送れるのか？ つて」

ああ、そうだつたのか。

優花の言つた通りだ。彼女も、俺達と同じような辛い過去を経験していたんだ。

優花も俺も、加納さんの方を見る。俺たちと同じ傷を負つた少女の方を……。

「だから、友達になつてなんて言つてくれる人に会えて嬉しかつた

加納さんは、一呼吸置いた。それから優花のほうを見る。

「本当はさつきまで、からかわれていると思つていきました。昔にも、こういう嫌がらせも受けっていて、なんだか信用できなかつたんです……。でも、高野君の一言で そんな半端な気持で一条さんが言つてない、つてことが分かりました」

「それじゃあ

加納さんは優花の方へ振り返り、涙顔で、それでも笑顔で答えた。

「優花さん、わたしとお友だちになつて下さい

「ほ、本当？」

優花の顔に、笑みの花が咲き乱れる。嬉しさのあまり、ぴょんぴょんと飛び跳ねる優花を見て、俺も少し心が安らいだ。加納さんは優花の前まで走ると、優花の手を握った。優花はボツと顔を赤らめると、緊張した声で言った。

「こちらこそ、おおおお願ひします」

なんだよ、そのお見合いみたいな返事の仕方は。俺はそう思いながら呟いた。

「まったく、いいコンビだな」

二人は、向こうではしゃぎ合っている。全く呑気だな。ん？ だけど、何か大切なことを忘れてないか？

俺は現実の切羽詰まった状況を思い出してしまった。探偵事務所の承認。その締め切り時間に、もう余裕が無いこと。

「優花、約束の時間まであと少ししかないけど、行かなくていいのか？」

優花はそれで我に返った。でも、優花は俺に向かって首を縦に振る。

「もつ、探偵事務所は諦めるわ。どうせ人数が足りないんだもん。またなか違うことを考えましょ」

「けど」

俺がそう言いかけたとき、優花は口元に人差し指を立てる。

「いいの」

どうやら、優花は吹っ切れたらしい。すがすがしい諦め方だった。それに、本人が言つなら仕方ないだろう。俺は、もう口出しあしない。

「分かった、それじゃあ、一応部活館の人につづいてくる」

そう言つて、俺は屋上から走りだそつとした。そんな時だった。

「その、部員が一人足りないんですよね？」

優花の両腕を握ったままの加納さんが、俺に言つた。俺は振り返つて、加納さんを見る。

加納さんの黒い瞳には、決意の表れがあつた。

「友達の願いが消えようとしているのに、放つておくわけにもいかないです」

今まで聞いたことのないような加納さんの凛とした声。その声は儚い印象を醸し出す加納さんには似合わず、燐然と輝く意思が垣間見えた。

「加納さん……」

優花は小さい声で言つ。すると、加納さんは優花に笑いかけながら囁いた。

「友達なんだから、ちゃんと下の名前で呼んでよ。優花

そして、彼女は俺にこう告げた。

「加納綾。一條探偵事務所に入部します」

この日、一條探偵事務所は正式に動き始めた。

番外 殺人鬼の夜（前書き）

これは、深夜の岡崎市のどこかで起こった事件。優花と綾が友達となつた、その日の深夜に起こった出来事です。

番外 殺人鬼の夜

涼しい春の夜風を受けながら、私は気まぐれに獲物を探す。この街の夜は、ひどく静かだ。閑静、なんてものじやない。全ての家が、灯りすらも外部に漏らさないよう息を纏めている。

まあ、そんなことはどうでもいい。私は、ただ黙々と獲物を探だけだ。

今日の風は一味違つた。いや、風を味と表現するのはおかしいと思うが、そう表現してしまつのは、ただ単に私の語彙が足りないだけだからかもしない。

ただ、風がいつもより気持ちいいのだ。風が靡く音も、吹かれて舞う自分の髪も、鬱陶しいだけのものだつたのに。

どうやら何がいい事でもあつたのかな？『わたし』は。

「あつはははは！ 何それ、まじウケるわあ！」

酷い雑音が、私の鼓膜を刺激する。ふと振り向くと、川の向こう岸。今から私が渡ろうとしていた人気のない橋に、一台の自転車が侵入してくるところだつた。

自転車を運転しているのは、茶髪の女子高生。

「ウソお？ 幸助のやつ小豆に告つたの？ マジでえ～？」

汚い声に、汚い顔。汚物のよつた肌をした女が、携帯電話を片手に夜道を走る。

それは、なんて無防備な姿だろ。

彼女は、きっと今から自信を持ちしきる悲劇なんて、微塵も信じていなかろう。今の彼女に、もし「あなたは今から死にます」と宣告しても、まったく相手にされない。それは、言うまでもない結

論だ。

だから、

だから、私は彼女を殺す。

目的もなければ、理由もない。

そもそも殺人鬼にとって、人殺しに対する理由の追及は必要だろうか？ そんな瑣末事は、考えるまでもない。

ヒトを殺すのが、殺人鬼の存在理由だ。それ以上の意味は無い。

私は、足取りを変えずに橋へと進入する。橋の幅は軽自動車がなんとか渡れるほどの狭さだ。周囲に灯りはなく、灯りの消えきったよう分からぬ施設だけが、自転車女の背後に建っていた。

目測では、自転車女と私が交差するまで数秒程。それだけあれば、充分に『殺し』は可能だ。

殺しの基本は無音。

音を出さなければ氣付かれない。

私は、音もなくモノを抜き放つ。鍛え抜かれた刃は、瘦せた狼の眼光のように鈍い銀色を放つ。

「そりや、アイツはキモいし小豆には釣り合わな

殺しの基本は手際。

早く始末すれば氣付かない。

静かに振った銀の剣閃は、女子高生の首を的確に撥ねる。切断の音は無く、ごくん。と、重たいボーリング玉のようなものが、コンクリートを打ち付ける音だけが周囲に響いた。

殺しの基本は即撤退。

逃げるに越したことは無い。

その場で殺しの感傷に浸っている場合ではない。すぐさま刀身に付着した血を紙で拭き取り、未練なくその場を後にする。

これが、私の『殺しの三カ条』だ。これを厳守している限り、私が犯人だということは絶対にバレることはな

ガシャン！ カラララララ

「あ

首の無くなつた体が操縦する自転車が、橋の向こう側。つまり、私が歩いてきた道の真ん中で盛大に倒れた。

殺しの基本は無音。

音を出さなければ気付かれない。

その後、私は全力でその場から走り去った。

第九話 非日常への誘い（前書き）

(、・・・) シーンが変わる時に出現します。

第九話 非日常への誘い

四月の朝は暖かい。先月まで尾を引っ張っていた冬の名残は完全に消え去り、暖かな日差しと穏やかな風が、玄関へと赴いた俺を迎える。

玄関の向こうには、お隣さんであり幼馴染の恵里香。親友の燕の二人が待っている。俺はそんな彼らと共に学校への道のりを歩む。それが、当たり障りのない俺の日常だ。

そんな通学路の途中。俺は、昨日の出来事を一人に話した。加納さんが優花の友達になつたこと。

探偵事務所が、今日から始動すること。

前者は俺にとつても望ましい出来事だったが、後者はそうでもない。今までのように、何か行動を起こしてまで設立を阻止しようとは思わないが、少なくとも俺は、優花とは同じ痛みを知る友人同士でいたかったのが本音だ。

そんなことを考えている時だった。

「ん？ あんた達じやない。奇遇ね」

聞き覚えのある声が、俺達の後ろから聞こえた。俺は嫌そうな顔で振り返る。

俺の想像した顔が、俺の頭一つと半分程下から見えた。

「またお前か、優花」

「またつて何よ、登校中に会うのは初めてでしょうが

長い髪を不機嫌そうに揺らしながら優花は言つ。探偵事務所を立ち上げたといふのに、そのテンションはいつも通りだ。

「おはようございます。みなさん」

ん？ どうして加納さんまで一緒にいるんだ？ 優花の隣には、転校生兼探偵事務所所員の加納綾さんがいた。

「あれ？ どうして加納さんが一條さんと一緒に登校してるんだ？」

恵里香が俺のモノローグと同じことを叫ぶ。

「えっと、結構家が近いことが分かって、今日から一緒に登校することにしたんです」

加納さんが、とても嬉しそうに話してくれた。その眩しささえ感じじる笑顔に、昨日の哀しい顔を想起するとなってしまった。

「やつか、それはよかつたな。加納さん」

俺は、加納さんの方を向いて言ひ。

「はいー。」

ま、なんだ。すごい笑顔だな。見ていくといつまで嬉しくなる。俺たちは、いつも以上に賑やかな通学路を、まっすぐ歩いていった。

(・・・)

さて、時間は経つて昼休み。俺は食べきった自作弁当を鞄に仕舞う途中、優花の席から戻つて来た加納さんに呼び止められた。

「あ、あの、高野君。ちょっと、いいですか？」

「ん？ 別にいいよ。どうしたんだ？」

別にたいした用もないのをそつと、加納さんはもじもじと、何か言い辛そうに視線を逸らす。

「えつと、いろんなところでは言えないことなんですねけど……」

「え？ ここでは、言えないの？」

「はい……。ちょっと、一人きりでお話しませんか？」

え？ 何このシチュエーション。転校一田田の少女に、俺はいつフラグを立てたんだろうか。

「……こちら近衛。アサルト部隊の要請を求む」

なんか前の席から燕の奇妙な声が聞こえた気がした。

「えつと、別にいいけど……」

「ほ、本当ですか？ ありがとうございます」

加納さんは、俺の返事に嬉しそうに微笑む。ってか、さつきから彼女以外の視線（主に男子生徒）からの視線に並々ならぬ危険を感じるんだけど。

一方、加納さんは少し恥ずかしそうに頬を赤らめて俺を見た。

「では、人気のないところへ案内してくれませんか？」

「突撃開始い！…………！」

真ん前の燕が突如叫ぶ。そして、その合図を待っていたとばかり

に教室に侵入してきたのは、悪鬼羅刹の如く怒り狂った男子生徒たちだった。

「GO！ GO！ GOオオオオオオ！」

しかもめちゃくちゃ殺氣立っているんですけど！ めっちゃ俺怖いんですけど！

「な、なんなんですか！？ あの人達！」

「知らないよ！ 僕の知り合いにあんな形相のやつらはない！」

とにかく、俺は加納さんの手を取つて後ろの扉からクラスを出ようとする。その時、燕と曰があつた。燕は、こちらを見て「ニヤリ」

「俺が作つた、美少女保護団体のアサルト部隊から逃げられるかな？」

「学校で私設部隊作り上げんなあ————！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3465z/>

一条探偵事務所へようこそ！

2012年1月10日23時47分発行